

令和4年度 前期末 人間学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、令和4年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された105科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者自身が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わないこととする。

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科12科目）、および図2（コミュニケーション学科13科目）にそれぞれ示した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は451名で、各学年それぞれ1年生=375名、2年70名、3年=3名、4年=3名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は329名で、各学年それぞれ1年=267名、2年=36名、3年=19名、4年=7名であった。昨年と比べると、心理学科の延べ人数は、ほぼ同数であるが、コミュニケーション学科は、昨年、1・2年生の落ち込みが顕著であったが大幅に回復した。また、過年度と同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに3、4年生の受講数は少なかった。

心理学科では、授業内容、授業方法ともに、昨年度より評価が高くなっている。コミュニケーション学科でも昨年度の評価と比べると今年度の評価は全体的に高くなっている。

両学科とも、昨年度より授業内容・授業方法の評価が高くなっており、コロナ禍で工夫された授業内容、方法等が、通常授業に戻っても維持されていると考えられる。しかし、総合評価は、両学科ともに昨年度より若干低くなっており、今後も注視する必要がある。

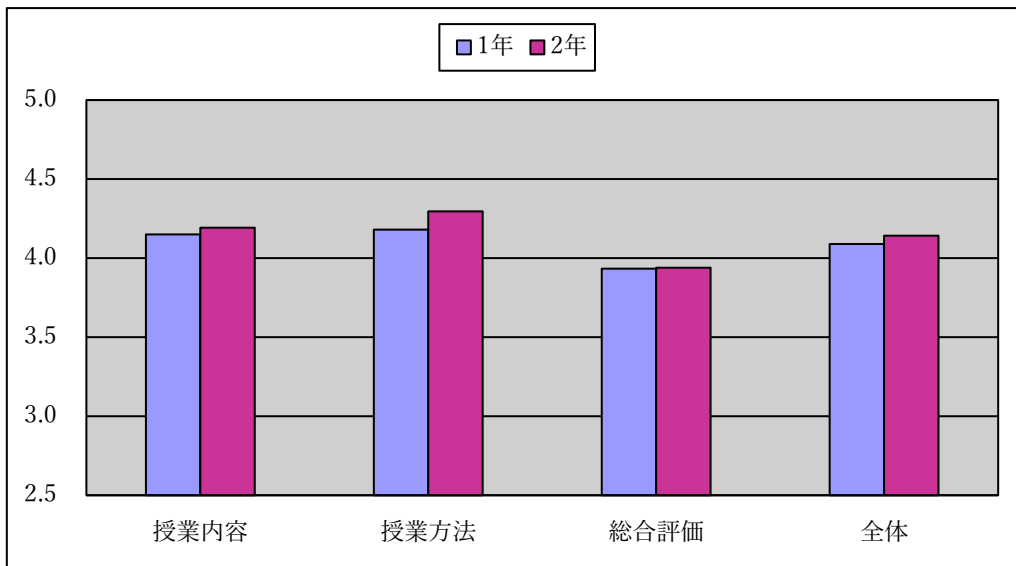


図1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=375名、2年=70名

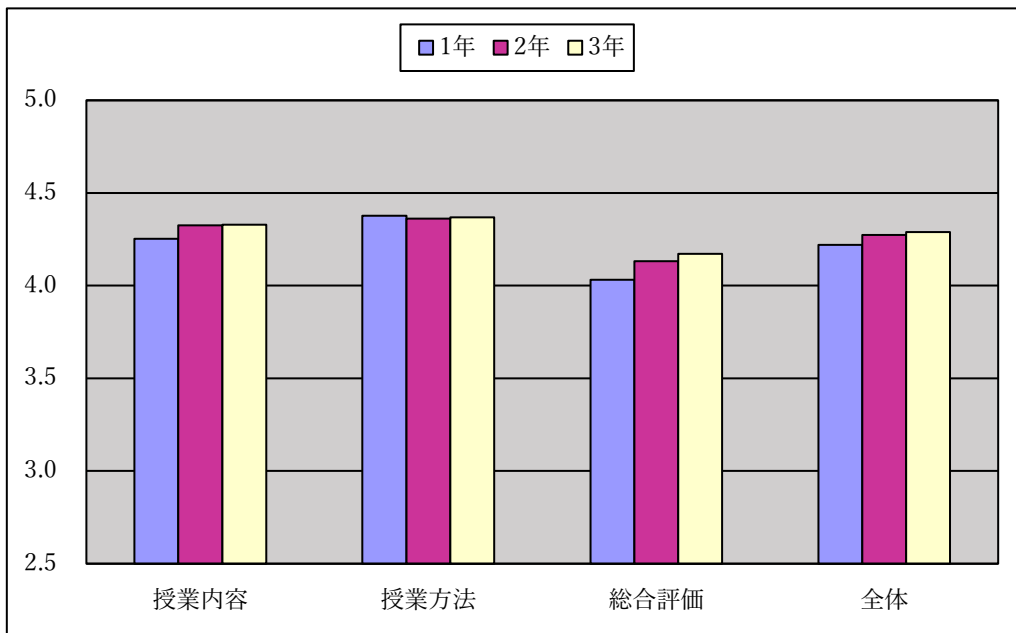


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=267名、2年=36名、3年=19名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科10科目）、および図4（コミュニケーション学科10科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は155名で、各学年それぞれ1年=129名、2年=22名、3年=4名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は117名で、各学年それぞれ1年=87名、2年=16名、3年=13名、4年=1名であった。

心理学科においては、1・2年生ともに4点を超える高い評価であり、2年生は1年生より高く、4.5点前後と全体的に高く評価されていた。昨年度と同様に全項目で2年生の評価が相当高くなっているのが見て取れるが、1年生においても授業内容、授業方法において評価が高くなった。一方で、コミュニケーション学科においても、若干ではあるが、全体的な評価が高くなっている。

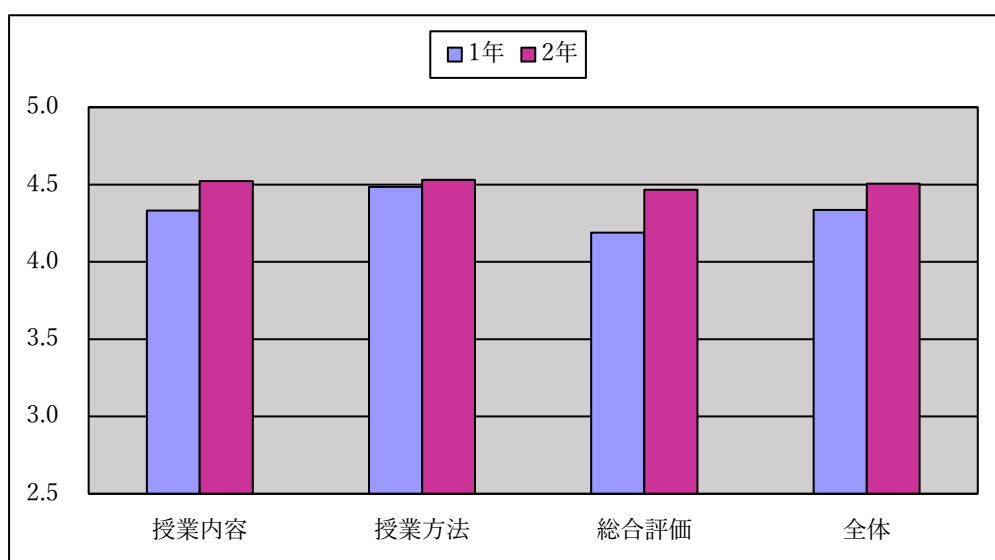


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=129名、2年=22名

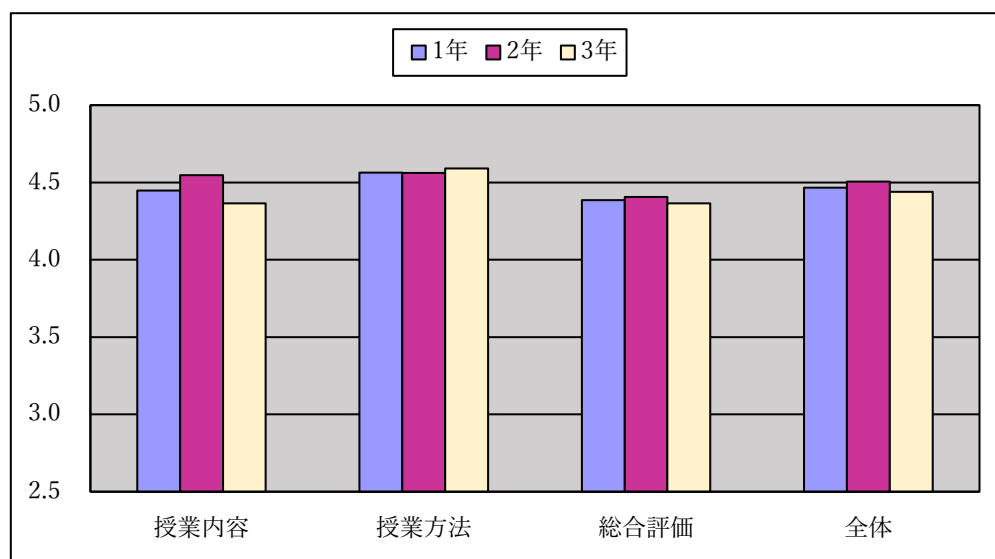


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=87名、2年=16名、3年=13名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 24 科目、コミュニケーション学科 46 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,498 名で、各学年それぞれ 1 年=225 名、2 年=561 名、3 年=660 名、4 年=52 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 850 名で、各学年それぞれ 1 年=285 名、2 年=327 名、3 年=161 名、4 年=77 名であった。

心理学科では、昨年度に比べ、授業内容における評価点が高くなっている。また、4 年生における評価がすべての項目で高かった。他の項目は昨年度と同程度であった。コミュニケーション学科においては、昨年度と比べ、授業内容において 1 年生の評価が若干低いものの、殆どの学年で昨年度と同様の評価点であった。コロナ以前の評価と比べた場合、どの項目も、総じて評価が高くなっており、専門科目でもコロナをきっかけに授業内容、方法について見直しがされ、今年度も維持されていると思われる。

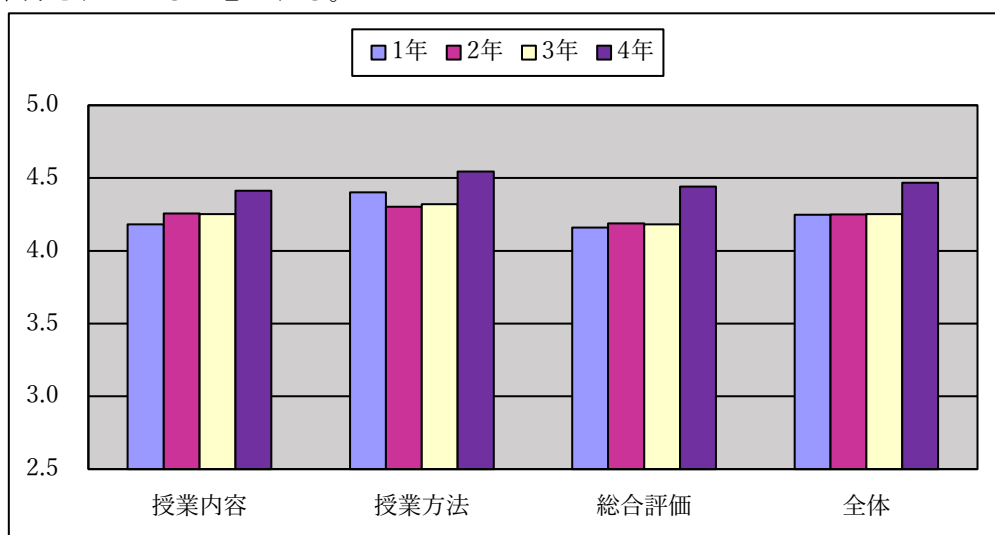


図 5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年=225 名、2 年=561 名、3 年=660 名、4 年=52 名

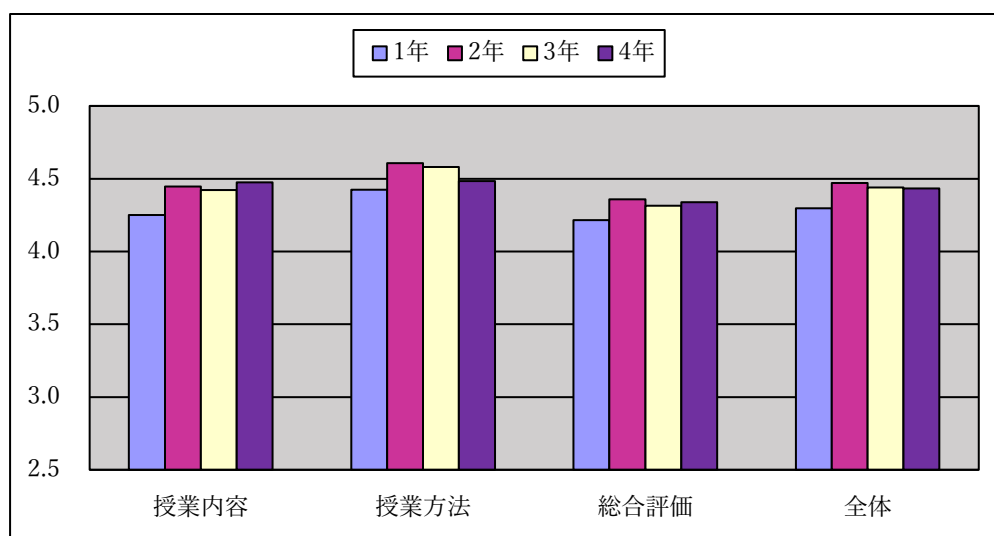


図 6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年 285 名、2 年=327 名、3 年=161 名、4 年=77 名

(4) 共通科目と専門科目の比較

本節以降 7 節までは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は 106 科目であったが、学部共通科目 11 科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図 7 は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ 12、24 科目、コミュニケーション学科では、12、46 科目であった。

両学科とも共通科目、専門科目に大きな変化はみられなかった。昨年度、2 年生の評価点が他の学年に比べ高かったが、今年度も同様に 2 年生の評価点が高く、また 3 年生は他の学年より低かった。心理学科では 4.3 前後、コミュニケーション学科は、4.3 以上の評価点であり、総じてどの項目も高い評価が得られている。この高さは、コロナ前、令和元年度と比較してかなり高評価と言える。

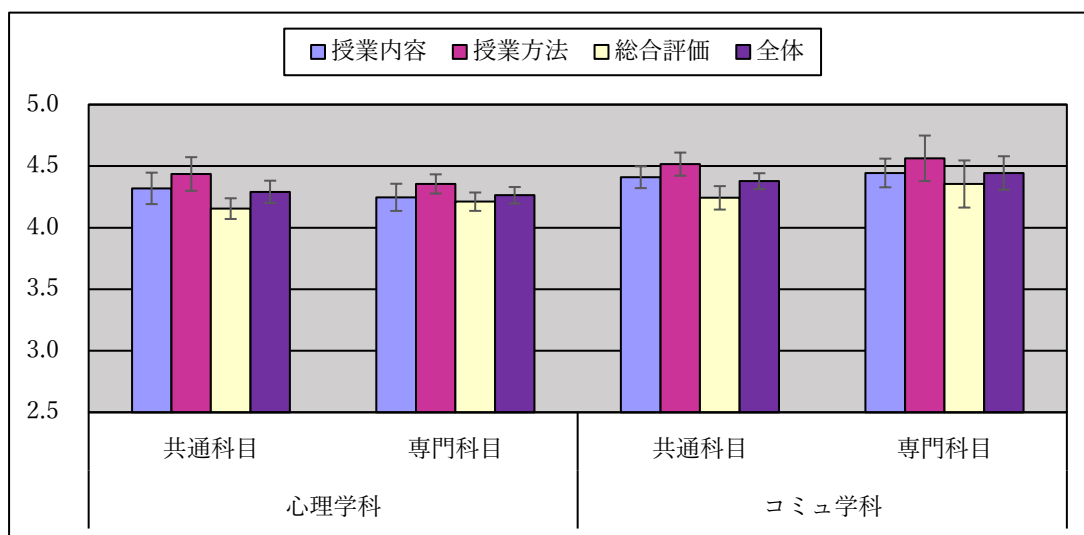


図 7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）

共通科目と専門科目数は、心理学科で 12、24 科目、コミュニケーション学科で 12、46 科目

(5) 必修科目と選択科目の比較

図 8 は別の履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ 9、27 科目、コミュニケーション学科では、10、48 科目であった。

共通科目、専門科目と同様に、両学科ともに、昨年度と比較し、大きな変化はみられなかった。心理学科は、総じて 4.0 以上、コミュニケーション学科は 4.3 以上の評価点であった。コロナ前、令和元年度では、両学科とも、4.0 を下回る評価もあったが、コロナ以降、高い評価を維持している。今後も維持し続けられるか注視したい。

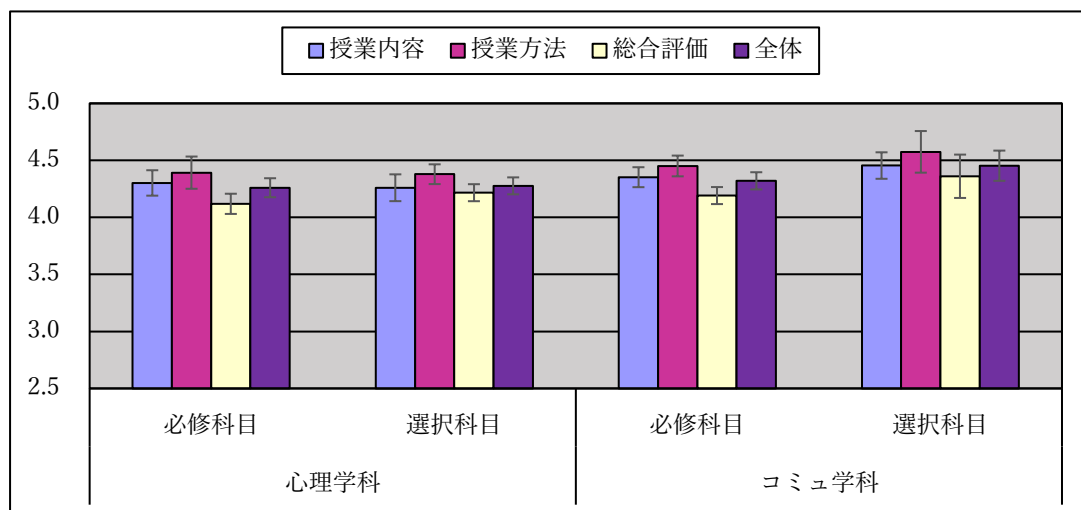


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)
 必修科目と選択科目数は、心理学科で9、27科目、コミュニケーション学科で10、48科目

(6) 科目の履修者数による比較

図9は履修者数（履修者が40名未満の科目と40名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が40名未満の科目および40名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ8科目、28科目、コミュニケーション学科では、46科目、12科目であった。

心理学科は40名未満が40名以上よりもすべての評価において得点が高くなっている。受講者数が少ない授業の評価が高くなる傾向は昨年度から見られるようになったが、差が広がりつつある。同様に、コミュニケーション学科でも40名未満の科目の評価点が40名以上のそれよりも高くなっている。また、両学科ともに授業方法の項目で高い評価点を出している。

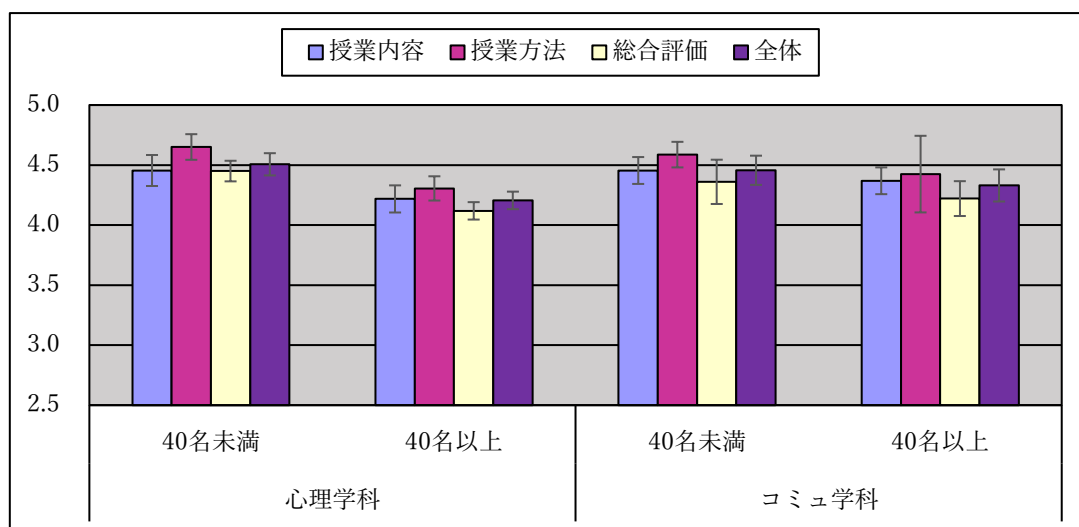


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)
 40名未満、40名以上の科目数は、心理学科で8、28科目、コミュニケーション学科で46、12科目

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図 10（心理学科）と図 11（コミュニケーション学科）である。

心理学科では負の相関が見られた（心理学科 $r = -0.35$ 、昨年度 $r = -0.43$ ）。しかし、履修者数が少ない授業に高い評価点が付けられるという傾向は若干弱くなった。一方、コミュニケーション学科では、昨年より高い負の相関（ $r = -0.66$ 、昨年度 $r = -0.19$ ）が見られた。（回収率 60% 以下の科目を除く。）

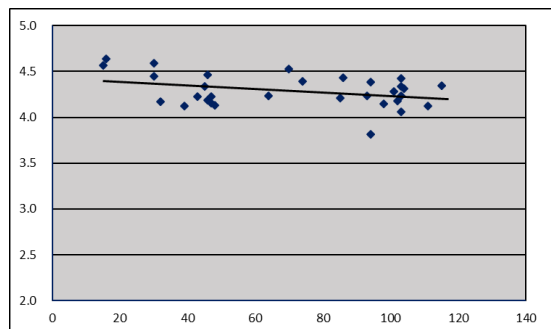


図 10 心理学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.35$ (n=32)

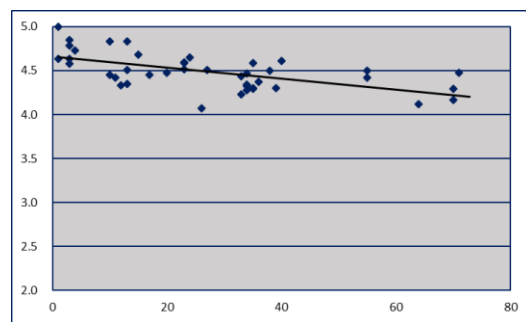


図 11 コミュニケーション学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.66$ (n=43)

（7）回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図 12 に示した。それぞれの科目数は心理学科が 7、5、24 科目、コミュニケーション学科が 7、5、46 科目であった。昨年度、共通教養の回収率がかなり低くなっていたが、今年度は、両学科ともに 7 割を超え、さらに、心理学科の共通語学では、8 割を超えた。専門科目では、心理学科において 7 割を超えたが、コミュニケーション学科においては、7 割を死守したものの 8 割近くあった回収率が低下した。引き続き、学生に呼び掛ける必要がある。

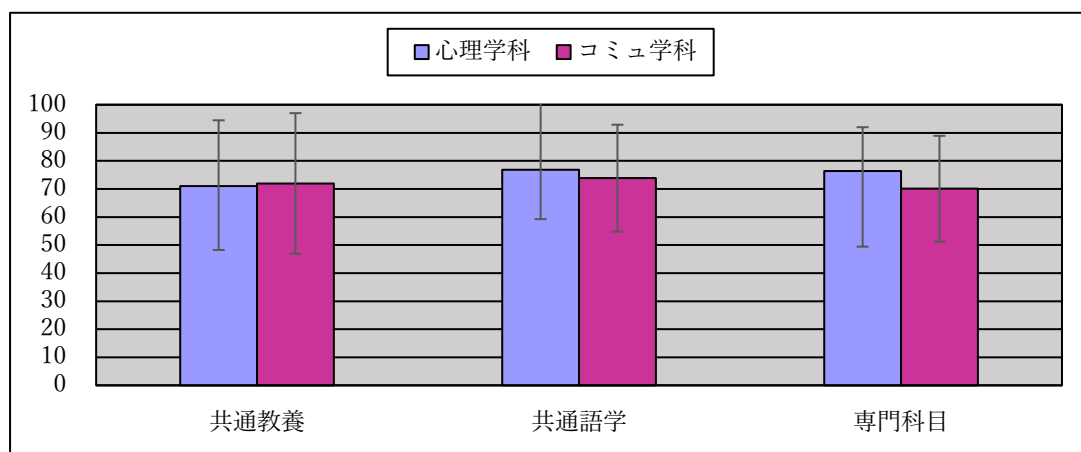


図 12 各科目の平均回収率（±SD）（%）

それぞれの科目数は、心理学科で 7、5、24 科目、コミュニケーション学科 7、5、46 科目

(8) 学修時間と学修行動

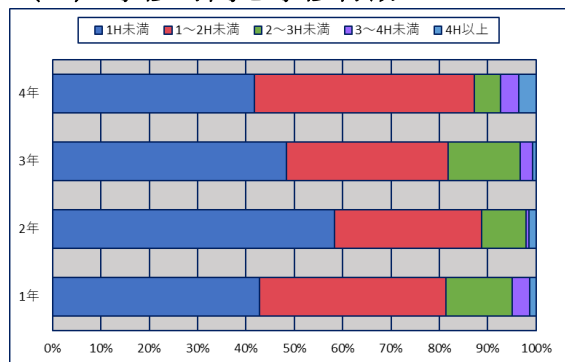


図 13 心理学科の授業外での学修時間

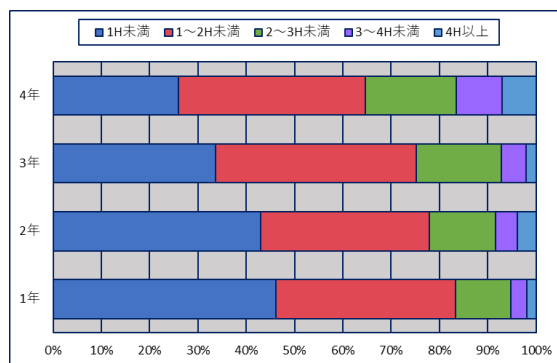


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、昨年度に比べ、両学科ともに、1h 未満の学生が大幅に増えている。特に 2 年生において 15%から 20%近く増えている。4 年において、1h 未満の学生は他の学年より少ないものの、2~3h 未満の学生が減る一方で、1~2h の学生が増えており、学修時間の短縮が顕著になった。

各教員は、これまでのコロナ禍で経験し培ったオンライン授業のやり方や教材の提示方法のスキルを維持しつつ、課題の提出にも気を配っていると思われるが、学生の学修時間はコロナ前の状態に戻っている様子が伺える。コロナ禍では、学修にあてる時間もやるべき課題も多かった一方で、自由になりつつある状況で、学修以外のことに時間を費やしている状況であろうか。課題の提出内容を今一度考える必要があるだろう。

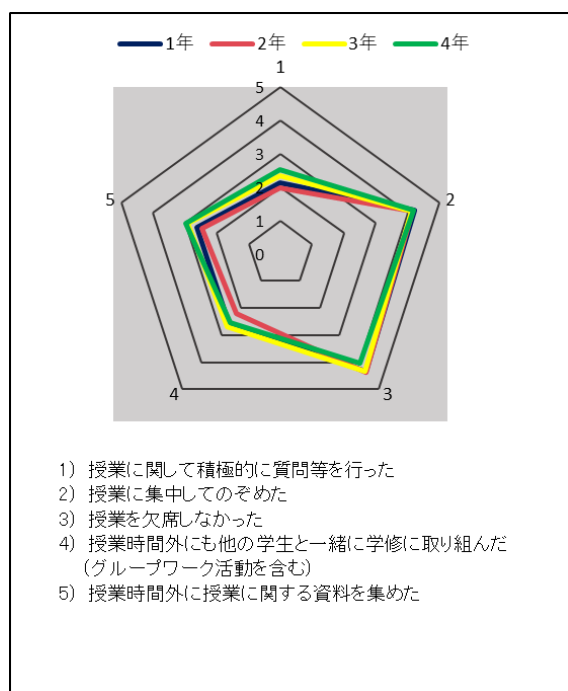


図 15 心理学科の学修行動

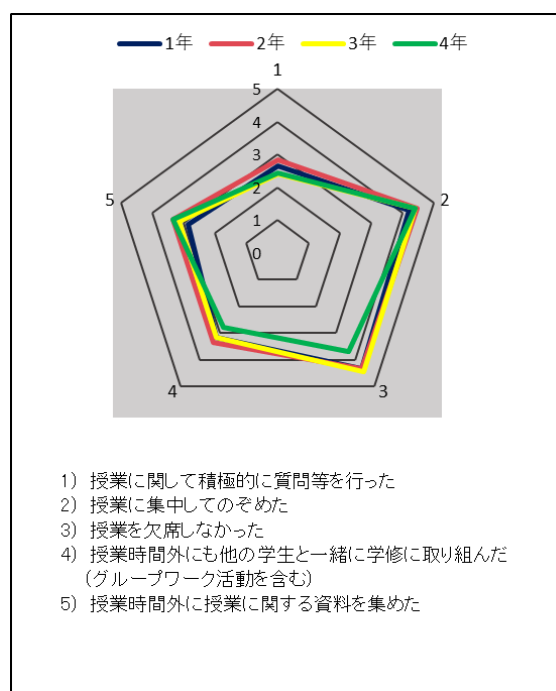


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。今年度は、最初から殆どが従来型の授業形態を実施することができた。「授業に集中してのぞめた」「授業に欠席しなかった」など、授業時間内に関する項目において、4.0以上の得点を得ていることから、やっと授業に集中できる環境が整い、学生らもまじめに取り組めた様子が伺える。しかし、授業時間外に目を向けると、心理学科では、昨年度若干増加していた「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の項目が、若干減少に転じており、他の学生と一緒に取り組む学修行動も3.0を下回っている。コミュニケーション学科では、ほぼ3.0以上を保っている。これらは、学科の特性も影響しているであろうが、引き続き、学修行動を引き出せるよう工夫が必要である。

(報告：山本雅代)

令和4年度 前期末 人間生活学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告は、令和4年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された112科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する15項目（評価基準は1～5点）の計15項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計15項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 2項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、5h以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 4項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として10項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「令和3年度仁愛大学FD推進活動報告書」を御覧ください。

（1）共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において6科目から回答を得た（図1参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が109名、2年生が35名、3年生が13名であった。

1・2年生の項目別評価は「授業方法」が高く4.3程度であり、その他、4.0程度であった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において6科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が72名、2年生が15名、3年生が30名であった。

1・2年生で、全項目の平均点は4.0程度で項目別評価は2年生の「授業方法」が高く、1年生は「授業内容」以外、4.0を下回っていた。

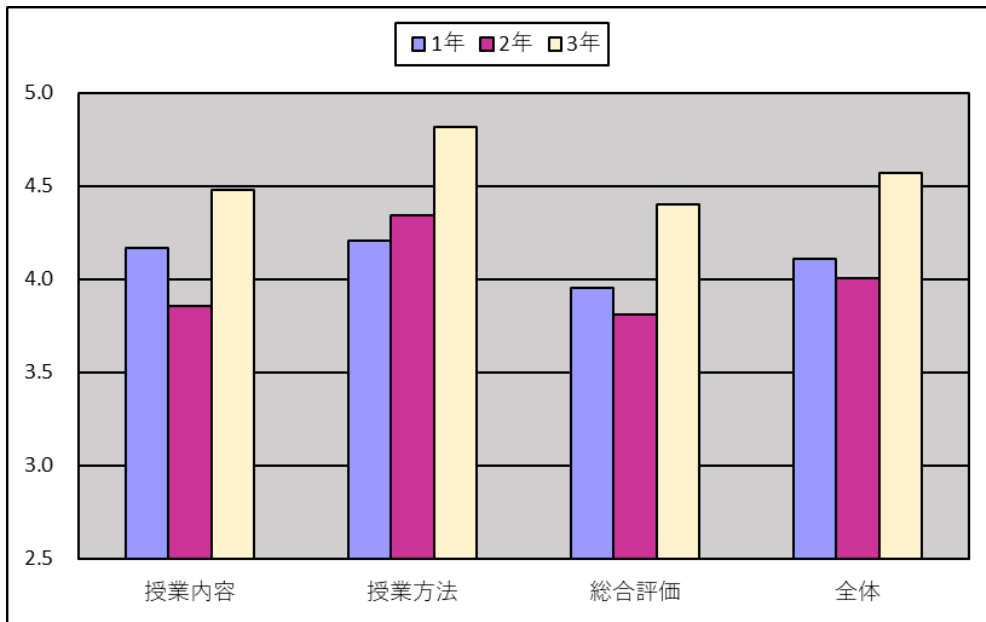


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=109名、2年=35名、3年=13名

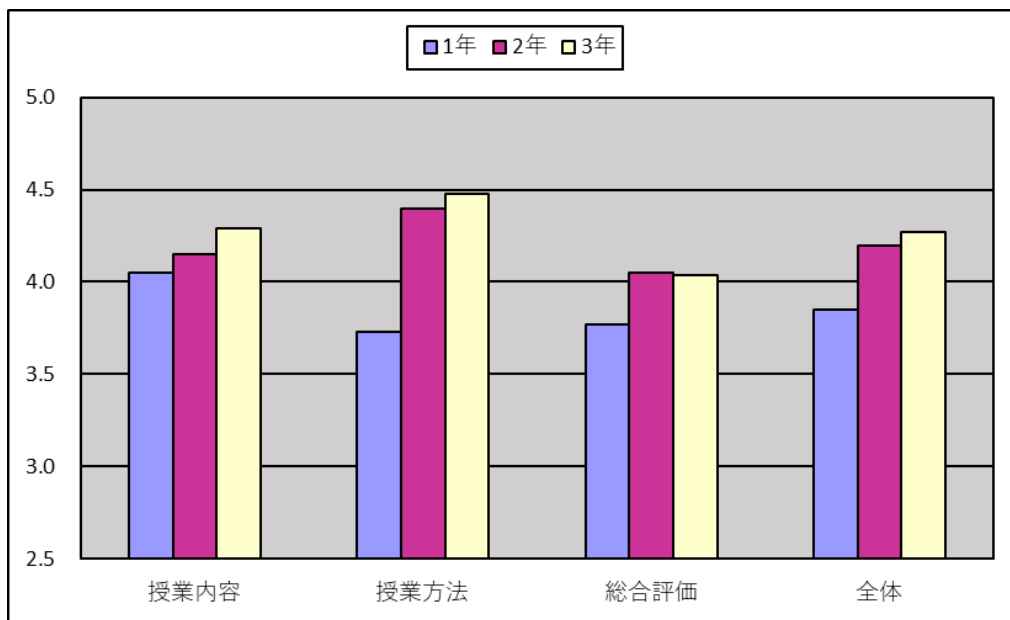


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=72名、2年=15名、3年=30名

(2) 共通語学科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が100名、2年生が22名、3年生が2名であった。

1・2年生共に、全項目の平均点はおおよそ4.0以上で、「授業方法」がやや高かった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が62名、2年生が21名、3年生が9名、4年生が1名であった。

1年生は全体的に4.3程度であり、2年生は4.0程度であった。

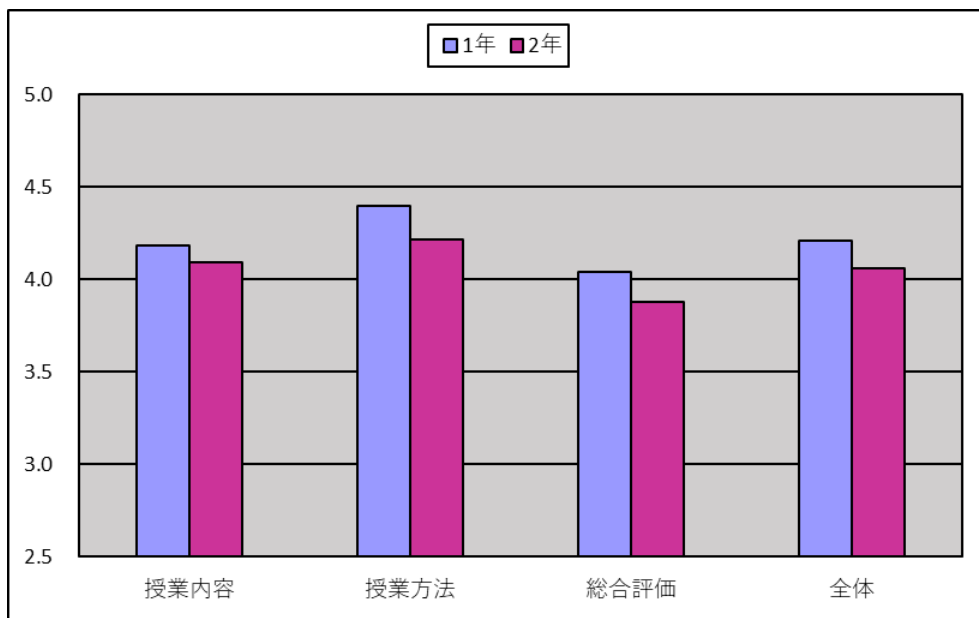


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=100名、2年=22名

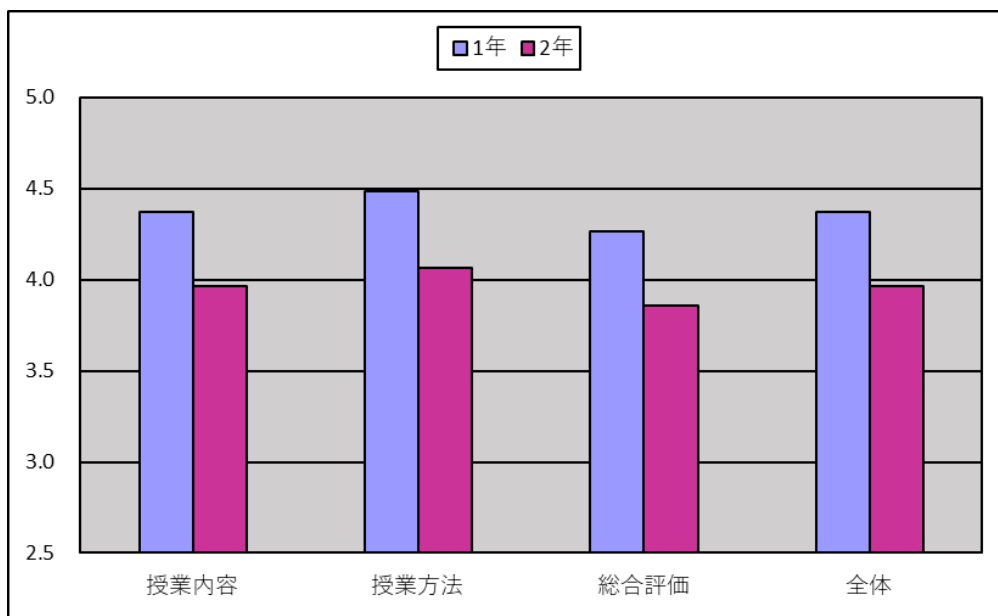


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=62名、2年=21名

(3) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 44 科目から回答を得た (図 5 参照)。延べ回答人数は、1 年生が 463 名、2 年生が 363 名、3 年生が 421 名、4 年生が 17 名であった。1 年生の「授業内容」を除き、全ての設問の平均点が 4.0 以上であった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、47 科目から回答を得た (図 6)。述べ回答人数は、1 年生が 326 名、2 年生が 477 名、3 年生が 245 名、4 年生が 67 名であった。

全設問の評価が 4.2 以上であり、1, 2 年生の評価はおおむね 4.5 以上であった。

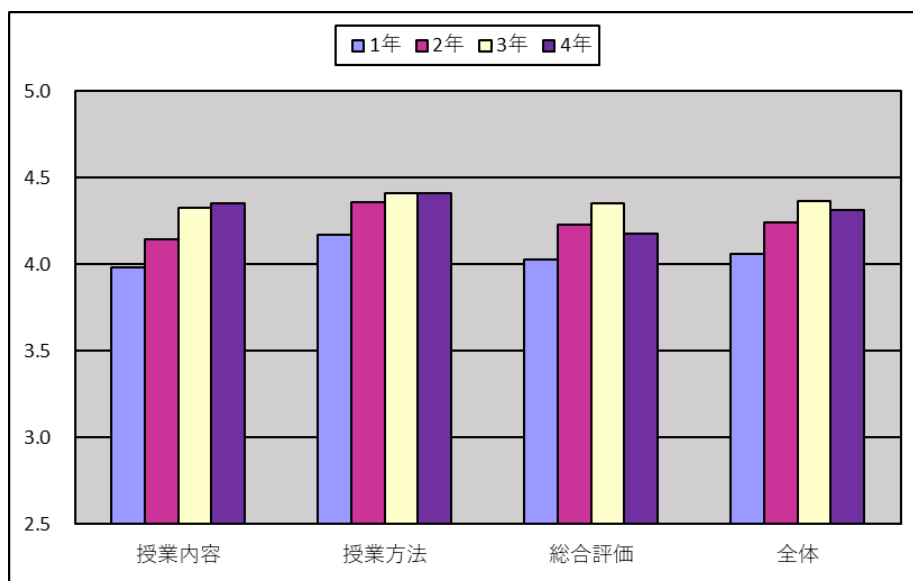


図 5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=463 名、2 年=363 名、3 年=421 名、4 年=17 名

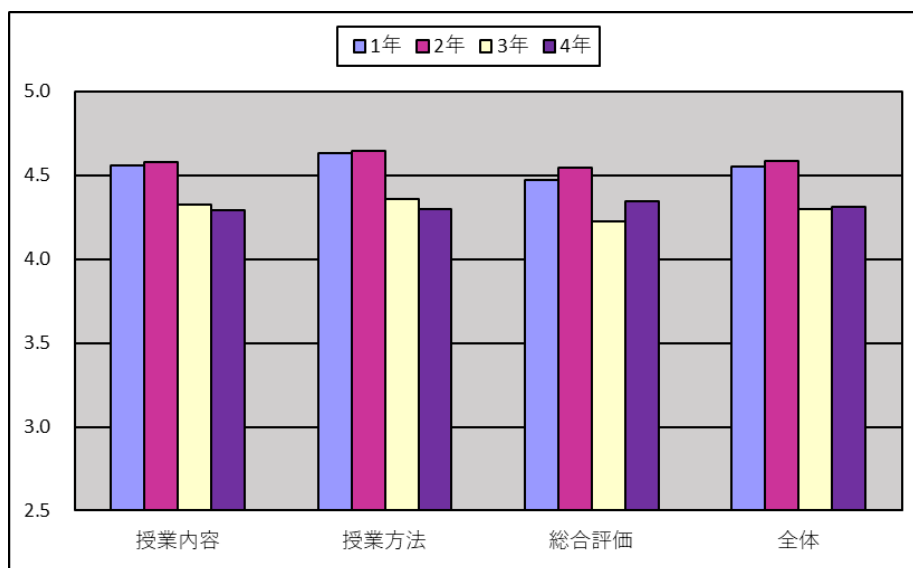


図 6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=326 名、2 年=477 名、3 年=245 名、4 年=67 名

(4) 科目種類ごとによる比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は103科目である。なお、学部共通科目11科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目の各設問の平均評価点は、共通科目の「授業方法」4.4程度を除いて4.0~4.4の範囲内で上下がある結果で、専門科目が共通科目に比べばらつきが小さいようであった。

子ども教育学科では、昨年度と同様の傾向で、すべての設問において共通科目より専門科目での評価が高く、共通科目は全設問の平均評価点が4.2程度、専門科目は4.5程度であった。

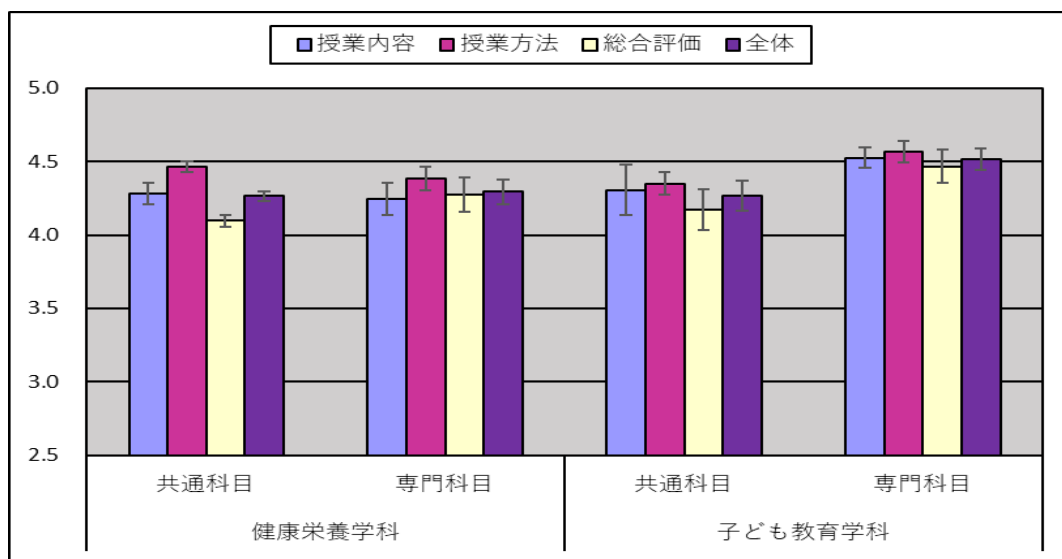


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で6、44科目、子ども教育学科で6、47科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は103科目である。

健康栄養学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点は4.3程度であり、選択科目の「総合評価」のみが4.3未満であった。

子ども教育学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点は4.5程度であり、傾向は類似していた。

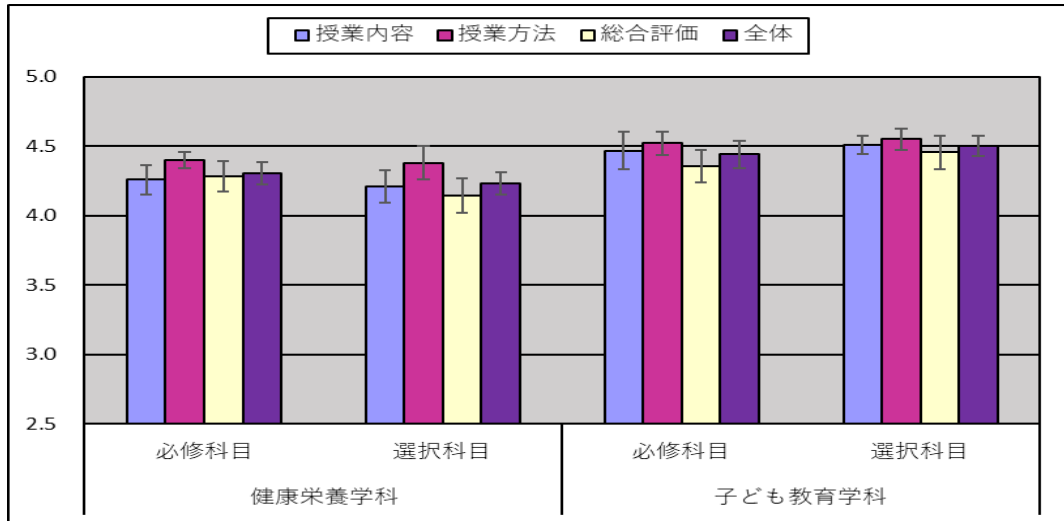


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で40、10科目、子ども教育学科で11、42科目

[受講生数による比較]

図9は、受講生が40名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は103科目である。

健康栄養学科での各設問の評価は、40名未満ですべての設問の評価平均評価点は、4.3程度で、40名以上に比べやや高めの平均評価点を示していた。

子ども教育学科での各設問の平均評価点は、40名未満と以上ともにすべての設問の評価が4.3程度であった。

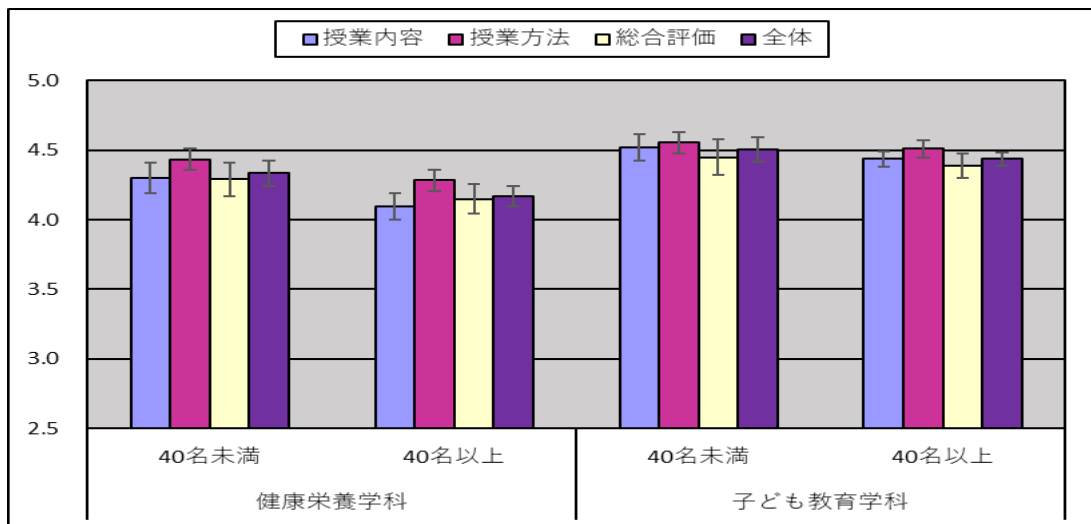


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で37、13科目、子ども教育学科で41、12科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図10~12は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。全体の相関が $r = -0.33$ であった。学科別にみると健康栄養学科は $r = -0.34$ 、子ども教育学科は $r = 0.26$ であった。(回収率60%以下の科目を除く)

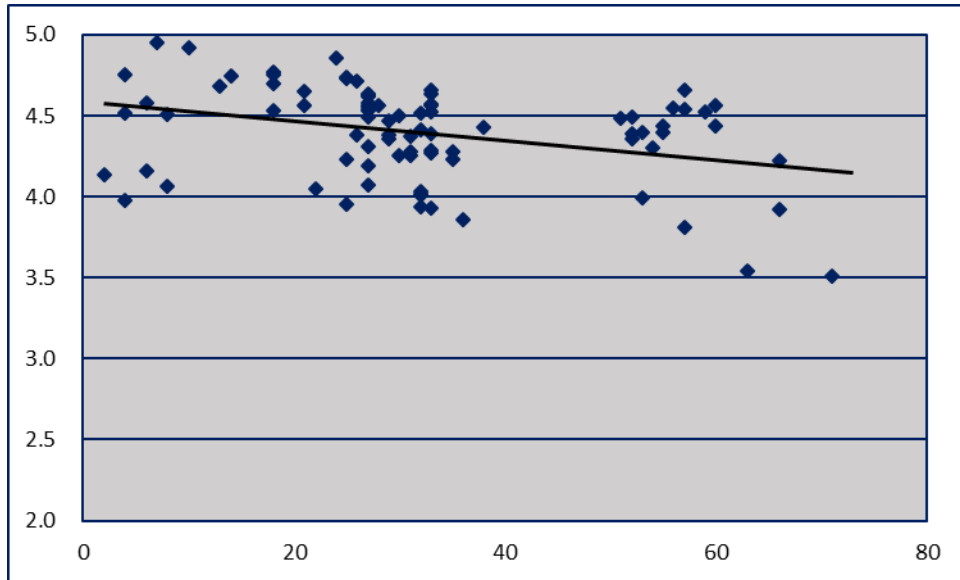


図10 人間生活学部 履修者数(横軸)と授業評価点(縦軸)との相関
 $r = -0.33$ (n=87)

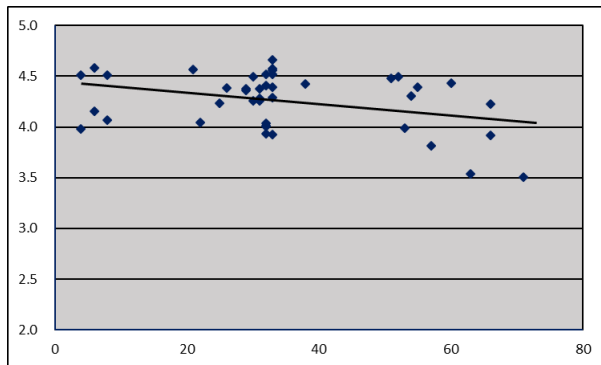


図11 健康栄養学科
 $r = -0.34$ (n=43)

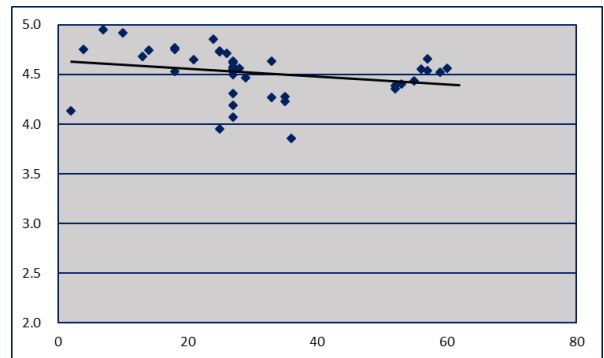


図12 子ども教育学科
 $r = 0.26$ (n=44)

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図 13 に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が 2、4、44 科目、子ども教育学科が 2、4、47 科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は、例年、共通教養科目・共通語学科目は両学科とも 90%以上であったが、健康栄養学科の「共通教養」を除き 60~80%程度であった。昨年に比べ多少改善傾向がみられたものの、子ども教育学科の「共通教養」と「共通語学」の回収率はやや低かった。

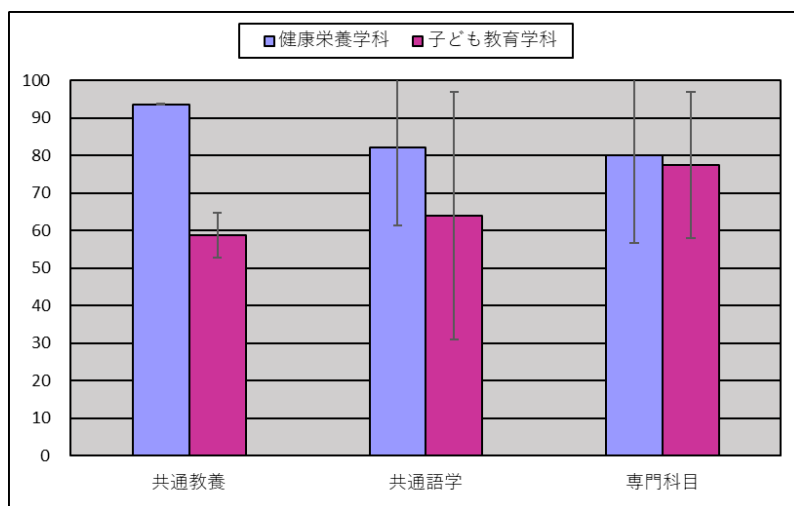


図 13 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、健康栄養学科で 2、4、44 科目、子ども教育学科で 2、4、47 科目

(5) 学外の学修時間

[健康栄養学科]

図 14 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は 1 年生が 672 件、2 年生が 420 件、3 年生が 436 件、4 年生が 17 件であった。授業時間数の関係から 1、2 年生では、「1 時間未満」、「1~2 時間未満」の割合が合わせて 80%を超えていた。

[子ども教育学科]

図 15 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1 年生が 460 件、2 年生が 513 件、3 年生が 284 件、4 年生が 68 件であった。4 年生になると 2 時間以上の割合が 40%を超えていた。

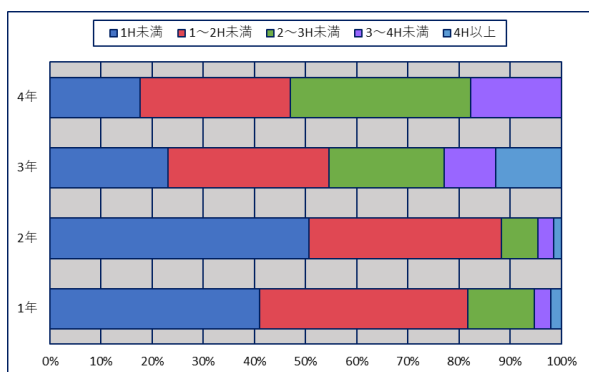


図 14 健康栄養学科の授業外での学修時間

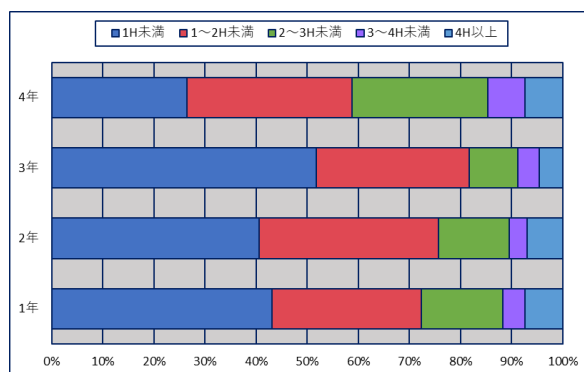


図 15 子ども教育学科の授業外での学修時間

(6) 学修行動について

[健康栄養学科]

図 16 は、健康栄養学科での学修行動について学年別に比較したものである。「授業に関して積極的に質問等を行った」、「授業時間外にも他の学生と一緒に学習に取り組んだ」、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の項目で3年生が特に高い値を示す傾向であった。

[子ども教育学科]

図 17 は、子ども教育学科での学修行動について学年別に比較したものである。「授業を欠席しなかった」の項目を除き、4年生が少し高い傾向がみられた。

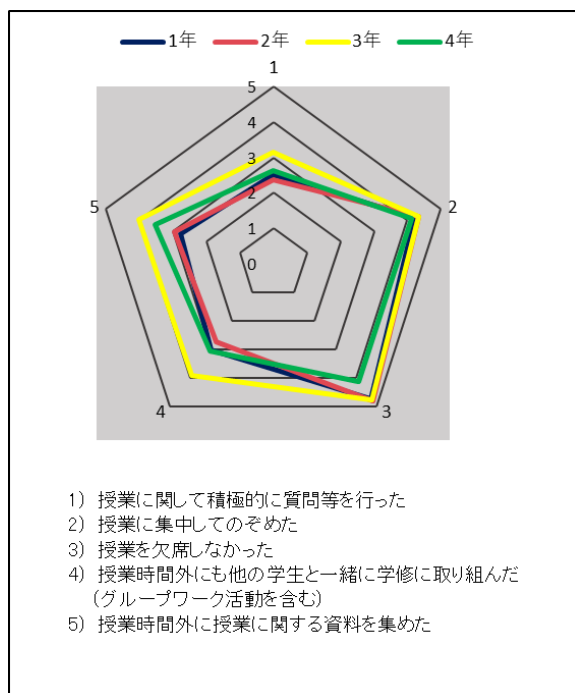


図 16 健康栄養学科の学修行動

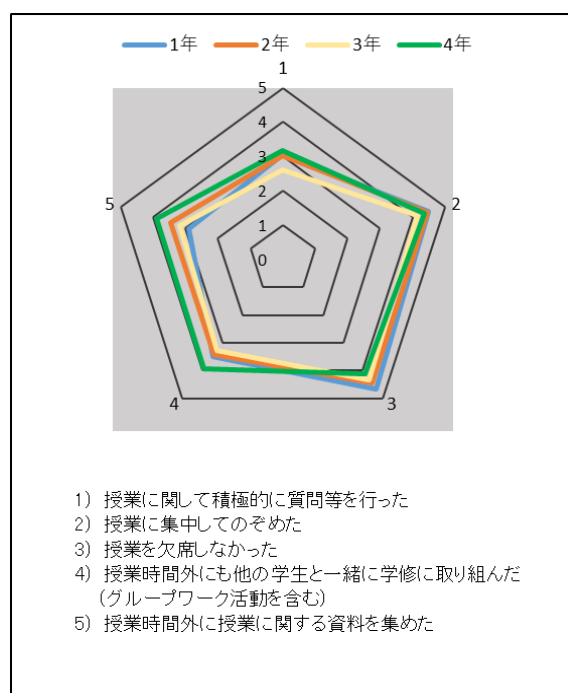


図 17 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。昨年度前期と同様、概ね例年通りであった。依然、COVID-19 の感染拡大の影響はあるものの、各教員の創意工夫により、授業の質が保たれたと考えられる。厳しい状況ではあるが、より良い授業を引き続き模索していくことが大切と考えられる。

(報告：出村 友寛)